

## 中川美和（令和二年十二月号）

君を拒む私の心はアムダリヤ行きつく先の海干上がりて

アラル海ひび割れし地に舟一つ西風吹けどはらむ帆無くて

海底みなぞこに沈みし太古の秘め事よいつこ行きしか岩塩しほはふきたる

鯖サンド（エセーニン）がぶり頬張るガラタ橋詩人よ君は此の地へ来しか

鴨川ゆ徒歩一〇分の我が日常行きて帰りて水は流るる



### ●作者の言葉

この度は佐佐木朋子さんの年間選者賞を頂き、有難う存じます。コロナ禍で人との出会いは行動範囲もぎゅっと狭

くなつてしまつた中、せめて想像の翼は時空を超えて広げたいと思ひ詠みました。水を失つた中央アジアの大地のイメージ、そしてエセーニンの

詩に憧れて旅したボスボラスの思い出を織り込みました。短歌を始めたのはちょうど十年前の新聞投稿から。それから心の花に入会し、たくさんの方と歌に触れてきた経験をととても貴重に感じています。今後も、心と感性を豊かに広げて表現していきたい。

### ●選者の言葉

今回は大月関さん（8月号）と、中川美和さん（12月号）の二人で非常に迷つてしまった。共に詠みたいテーマがはつきりしている。作品に力がみなぎっている。

表現や構成を比較すれば、大月さんの方が歌の形に添っている。生と死の対比も、これは期せずして彼の人生に降りかかってきた事態なのだろうが、うまく一連に収まっている。そしてなにより生への執着が好感が持てる。

それでは、中川さんの方は？と言うと、アナキーな言葉の使い方が魅力だ。言葉が次々に弾けてくるのだろう。言葉と想念が出会い、助け合つて対立している世界。言葉が肉感的なのも良い。作者と言葉と想念が三つ巴になっているスリルがある。